

地元民の亀三郎たちを見る目が少しずつ変化する

地元の人たちも 少しずつ理解するように

亀三郎たちが鴉根の丘に救済所を造ろうと開墾を始めたのが明治30年。成岩の極楽寺の仮住まいから毎日、毎朝、鴉根に通います。

それを見る町の人たちの目は冷ややか。それもそのはず、それまでの亀三郎は侠客。亀三郎について来た30人の若者も、昨年まではヤクザか不良少年。「どうせ長くは続かないよ」。

ところが2年経っても亀三郎たちの姿勢は変わりません。驚くのは若者たちの姿です。汗まみれ、泥まみれで懸命に働いています。それも他人のための無償の労働です。

町の人たちの彼らを見る目が変わっていきます。

慈善事業だって？しょせんヤクザのやることだ。
何か裏があるに違いない。気をつけろよ。



↓
2年後

亀三郎は立派だね。
ヤクザの組を解散して困った人を助ける村を造るなんて。
初めは信用していなかったけど、応援しようかな。



若い衆がえらいよ。
この前までチンピラだった連中が、
泥だらけになって働いている。感心だ。
俺の店にもあんな若い衆がほしいよ。

救済所が認知された日 みつひろゆうごん 光弘祐言の来所



「やさしいことは弱いことではない。
やさしいことは強いことだ！」

明治33年6月7日は救済所にとって素晴らしい日。光弘祐言の来訪です。光弘は愛知県典獄参事官代理で愛知県の更生保護の基礎を作った人です。

光弘は救済所を視察すると亀三郎に「立派な施設です。ご苦労様。私もできるだけ応援します」。

そして若者たちを集めると一人一人の手をしっかりと握り「ありがとう」「頑張ったね」「君たちを誇りに思う」。握った手には十銭銅貨が1枚。つまり感謝の言葉と、一人十銭が贈られたのです。

若者たちは昨日まで世間から疎まれる境遇にあった者ばかり。だが今日初めて「世に必要だ！」と言われたのです。若者の目には感激の涙、涙。

